

答申にあたって

立川市の文化芸術振興は、行政と市民が協力し努力してきた結果、着実に成果が蓄積されてきている。文化振興推進委員会でも、成果と課題について積極的に議論されてきた。第4次文化振興計画の策定にあたり、前期（平成29年3月～平成31年3月）に行われた4回の議論は方向性を明確にする上で貴重だった。

《活動の場・発表の場・交流の場の創出》《若手アーティストの支援》《未来の担い手 子どもたちへ》の3つのテーマを設け、それぞれの委員が関わってきた具体的事例の発表を基に意見交換が行われた。

今期の委員会（令和元年6月～令和3年6月）では、これまで議論されてきたことを再確認し、より具体的にしていくこと、多様な主体と環境を意識し、世代や障がい、格差を超えて表現し、享受、参加できる場をつくることが委員より提起された。

立川市の物的、人的資源を積極的に活用することとして、公共スペースの柔軟な活用や民間の施設や店舗との連携、活用などが具体的な例として挙げられた。立川市の理念をより積極的に発信し、だれもが共有できるようにすることを基調に策定が進められた。

文化芸術は独立した概念ではない。社会に欠かせないものとして、産業や生活に結びつけていく努力が重要である。もともと文化は生活の様式そのものである。地域に固有の文化・芸術が根づいてきたのは、日々の暮らしや生産と密接に結びついてきたからにほかならない。口承文芸、芸能、技芸などが祈りや祭りの中で発達してきた。精神活動の所産であり、成熟した芸術活動は、学問とともに文化を形成するうえで大切な役割を果たしてきた。

私たちは、バーチャルな空間が現実にも混在する複雑で多様な環境の中にいる。人間が作り出す文化全般を見ていく視点と、立川固有の文化に関心を向けていくことがますます必要だろう。

第4次文化振興計画は、第3次計画をさらに発展させ、着実に成果が見えるようまとめた。取り組み方針、Ⅰふれる、たのしむ、Ⅱはぐくむ、ささえる、Ⅲつたえる、つなげるは、Ⅲを2つに分けてⅢつたえる、とどける、Ⅳつなげる、ひろげるとした。重点的な実施項目として、Ⅰでは、市民の文化芸術活動支援、Ⅱでは、障がい者を含めだれもが活動に参加できる環境、Ⅲでは、立川固有の文化財、伝統文化を伝える、生かす、Ⅳでは、文化芸術の意義をより積極的に伝えていく努力と活動の輪を広げ、繋げることが強調された。

ここに「文化芸術ではぐくむだれもが楽しめるまち」を到達目標に、第4次文化振興計画をまとめることができた。立川市にはさまざまな形で文化芸術が根づき、広がっている。市民の活動が背景にあるとはいえ、民間企業、施設、団体の文化芸術への関心とサポートも大きい。立川市地域文化振興財団、立川文化芸術のまちづくり協議会による立川独自の活動も触媒として重要な役割を担っている。

行政と一体となった努力の成果であり、立川市が、だれもが文化芸術を実感できる魅力あるまちとして、さらに発展していくことを願ってやまない。

最後に、ご多忙にもかかわらず熱意をもって策定に参加された委員各位、および、支援をしてくださった事務局の方々に心より感謝したい。

2020（令和2）年1月21日

立川市文化振興推進委員会 委員長 今井良朗